

『基本的な事に関するQ & Aと要点、注意点』

『質問』

質問 01 「お灸の指導は、何壮ずつ、いつやったらいいか？」

直接灸は7壮、膝関節の灸は3ヶ月を目標にやるが、まず1ヶ月をめどにやってもらう。毎日のお灸が大切です。

お灸の時間は何時でも良いが、風呂は前後1時間ほどあけた方が良い。

質問 02 「治療はどこで成功とみるか？」

歩けない場合、筋断裂等の鍼灸では手におえない人も稀にいるので、すぐに軽くするのは無理かもしれないが、一連の反応を取っていく。ただしあまりひどい人は無理である。薬を飲んでいる人や慢性症の人は治りにくい、ただ単に腰の筋肉に関する痛みだけであまり病気をした事がない人は治りやすい。

質問 03 「各処置を全部やる場合の順番は？」

全部の処置をしなくてもよいが、何が必要な処置か各自考えて選択する。臨床を重ねると経験的に自然に判ってくる。

結合組織活性化処置は必要である、又、筋緊張緩和処置は必要に応じて処置する、帯脈は必要な場合が多い。

順番は特に考えなくて良い。

質問 04 「各処置をするのは、別々に処置をした方がいいですか？」

処置によっては、同時進行でも構いませんよ。

例えば「扁桃処置」と「瘀血処置」に「副腎処置」等、同時進行でもいいです。

質問 05 「留鍼をする場合は、重症の時だけですか？」

慢性症や、治りにくい場合に必要です。

質問 06 「うっ血は実と考えていいですか？」

虚とは言えない、充血とともに実と考えていい。

質問 07 「実のときは、それを取るのを優先させて良いのでしょうか？」

「虚・細」のみで、腹の反応が無い時は「S・U・尺」等でよい。

この方の場合、腹に反応が強いのでそれを優先する、「F・尺」(火穴の反応が総て出ている場合の処置)は必要ではない。

質問 08 「今日の肺経の診断を見ると、実の症状が多いが、虚の症状は無いのでしょうか？」

実の方が反応が出やすい（圧痛、火穴診 e t c）ので、診断として実を目安にし易い。虚を無視しているわけではありません。

治療上の注意点、要点

- 1) 治療は一回一回結果を出していかないといけないけど、根気強くやらないとダメ。
- 2) 慢性疾患は、皮内鍼では効果が薄い、施灸が大事。
- 3) ツボを覚えるのも大事だが、「手技」を覚えるのも大事。
長めに雀啄、切皮瀉、十分な留鍼、微量雀啄、浅刺雀啄、補鍼、瀉鍼、直刺、斜刺、硬いところをほぐすように雀啄 e t c。
- 4) 鍼の感受性がいい人は、反応が取れやすい。
- 5) 初診の患者で、反応が取れやすい場合「早く治りますよ」と告げてあげると安心する。
- 6) 初診をいかに増やすかは、一回の処置でいかに軽くしてあげるか。
圧痛が取れて、症状が緩解していけば、患者も納得する、小さな成功が、大きな治癒効果に繋がっていく。
- 7) 「気がめぐる」ということは、「血がめぐる」ということになる。
- 8) 「実」の場合「補う」とまずい、抜鍼後、穴は閉じない「瀉」。
- 9) 腹の神経は「副交感神経」で、これを鼓舞するように。
- 10) 脈の変化、腹の変化、これらが治療の目安になってくるが、あくまでも他覚症だが、自覚症の消失が大事。最後に確認。
- 11) 処置をあれもこれもたくさんやるより、何を主眼に置くかを考えて絞ってやる。
刺激量過剰では疲れやすい。
- 12) 術者の手は暖かくする、冷たいと気の出が悪くなる。
- 13) 中国の著明な気功の先生は「振せんが一番気が届く」と言われる、つまり雀啄と同じだと思う。
- 14) 長野式処置法でも、経絡は気血が流れているので、雀啄がその促進に繋がり、重要である。

- 15) 雀啄はただ機械的にやるのではなく、気の流れをイメージしながら、しっかり丁寧に。
- 16) 治療後の変化（脈、腹、圧痛 etc）を会得してもらいたい。
- 17) 雀啄を丁寧にやり、気が巡ってくると、呼吸が大きくなる、そうなるとう効いてきている。